

N o 3 : タイの食品見本市

ほぼ笑みの国、タイ。国土は日本より少し大きく、人口は約半分。首都バンコクでは、壮大なチャオプラヤ川沿いに寺院が立ち並び、和やかな笑顔の人々が行き交う。熱帯特有の蒸し暑さと、バイクに屋台、観光客……。大型商業ビルの喧騒と活気が街を包む。

本県との関係は深い。2022 年には福田富一知事がトップセールスを行い、農産物や日本酒など県産品の魅力を発信した他、タイ国政府観光庁と「観光交流促進に係る趣意書」を締結。インバウンド（訪日客）誘客の拠点もあり、本県への宿泊者数も常に上位だ。

この地で5月に開催されたアジア最大級の食品見本市、THAIFEX（タイフェックス）。巨大な会場に世界のバイヤーが集まった。本県は6年ぶりにブースを出展した。今回は出展者の目線から感じたことをお伝えしたい。

本県ブースには矢板市の農水産物加工品製造の「壮関」、宇都宮市の「増井養魚場」の2社が参加した。販路拡大、開拓という目的の下、それぞれ「茎わかめ」や「粹鮎」などの商品を積極的にPRした。連日、タイをはじめ世界中のバイヤーを迎え、試食もあつという間に品切れ。商談だけでなく、駐タイ日本国大使の来訪や地元紙への記事掲載などもあった。

一般来場者からも「どこで買えるのか」、「いつから販売するのか」など多くの好意的な質問が寄せられた。

周囲のブースでは、煎茶や抹茶、しょうゆやタレなどの調味料、ラーメンなどのインスタント食品、和菓子、焼き芋、グルテンフリーのクッキー、特産のユズを使ったアイスや飲料などが人気だった。酒類ではウイスキーやクラフトジンにも注目が集まった。

インフルエンサーの投稿が拍車をかけ、抹茶のブースには来場者が殺到。正面のイタリアブースでは、パスタ、チーズなど、後方の米国ブースではカラフルなあめやポップコーン、フルーツなどが並んでいた。

見本市は華やかな世界だが、苦労も多い。時間も費用もかかる。期間中は立ちっぱなしで、試食の用意にかかりっきり。準備日は冷房もつかない上、突貫工事のブースは棚が外れたり、水道が壊れたりもする。

それでも、世界中の関係者と直にやりとりできる貴重な機会である。県産品はきっと目を引くだろう。見本市への参加はきっかけづくりだけにとどまらない。その先に本物の出合いが待っている。



【タイフェックスのジャパンパビリオン入り口の様子
=5月、バンコク】

県香港事務所長 鈴木高明